

目的 現代における被服の着用目的は身体の保護機能だけでなく、人間の心理面を反映した美的機能の果たす役割が大きい。なかでも、被服の色は人間の心理面にかなり影響を及ぼすものと思われる。そこで、被服に関心のある中学、高校、短大生の女子を対象とし、被服の色の嗜好のちがいを比較検討し、年代による嗜好変化の様子を考察した。

方法 日本色研98色の中から、色相とトーンの異なる25色、さらに、この25色による二色配色の中から25とおりの組み合わせを抽出し、これらの試料について、好きと嫌い、着たいと着たくない色を調べた。さらに、単色ではワンピース、二色配色ではブラウスとスカートのスタイル画に色紙を貼付した試料を用いて、イメージ調査を行った。

結果 単色では「好きな色」と「嫌いな色」はほとんど差がみられず、いずれの学生も約半数が白と黒を好むことがわかった。これは最近のモノトーンの流行が若年層に浸透したものである。「嫌いな色」は紫色と暗いトーンが多く、「着たくない色」では、中学生はダーク系、短大生はビビッド系、高校生はその中間のトーンを示し、差がみられた。また、「嫌いな色」と「着たくない色」は必ずしも一致しないこともわかった。二色配色では、中学生は白を使った配色を好むのに対し、高校生は反対色や黒の配色、短大生はダルトーンなどの濃い配色を好むことがわかった。イメージ調査では、白とパール系は「軽い」「涼しい」、ダーク系は「地味な」「重い」イメージが強く、白を除く二色配色の組み合わせは、いずれも「嫌いな」「地味な」「不快な」といった悪いイメージがあり、単色に比べて配色の調和のむつかしさをあらわしているものと思われる。